
先生と私

舞原 愛香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先生と私

【Nコード】

N1403M

【作者名】

舞原 愛香

【あらすじ】

先生と堇の甘甘ストーリーです。

初めての恋愛小説なので緊張ぎみです……。

1 はじめに

1 はじめに

私は、出会った時から安西 守が好きだったのかもしれない。

私は屋敷から一步も出たことがなかった。
でも、それを不幸だとは思った事は無かった。

何故ならそれが当たり前だったから。

私、椿原 堇は椿原財閥の一人娘で大事に育てられてきた。
私は、父と母の言うことさえ守っていればいいと、思っていた。
そしたら、幸せになれると信じていた。だけど、それは私の甘い考
えで、現実はずっと厳しいものだった。

先生、ありがとう。

私は、先生がいたからあの学校でやっていく事が出来ました。

私は、今19歳。

これから、先生と私の過去をお話します。

2 今日から高校生！？

2 今日から高校生！？

朝起きて顔を洗う、そして彼女はため息をついた、他の人が羨むカラスのようにしっとりとした黒髪に闇よりも深い漆黒の目を彼女は嫌いだっただ。

「おはようございます。堇様。昨晚は、よく眠ることが出来ましたか？」

入ってきたのは、安西 桔梗。

堇の専属メイドだ。

栗色の髪を後ろでおだんごにしている。堇は、彼女の翠色の目に見つめられるのをあまり、好きでは無かった。なぜなら、自分の全てをみすかされている気がしたから。

「あの、お伝えしなければいけない事があるのです。今日から、聖エーデルワイス女子学園に入学して頂きます。聖エーデルワイス女子学園とは、全寮制で孤島にたっています。」

桔梗は、私に聖エーデルワイス女子学園の白いセーラー服を渡しながら私に教えてくれた。

でも、その話は右から左へと聞きながされていった。なぜなら、外に行ける、しかも高校ということでテンションが上がりっぱなしで聞けるはずも無かった。

高校といえば、少女漫画でよく舞台にされる、青春の宝庫だ。

私は、自動的に着替えさせられていた。

「さあ、堇様行つてらっしゃいませ。」

真新しい、黒いローファアを履き、初めてあびる太陽の光にたえられながら、待ち合わせの人が来てくれるという、駅まで、走った。

3 初めての友達

3 初めての友達

「ここが、聖エーデルワイス女子学園ですか・・・思ったより学校って狭いのね・・・。」

そこは、東京ドーム4つ分の広さ、狭いとはほど遠い所だった。彼女の家は、東京ドーム1・5個分の広さなのだが・・・。

『新生入場』

上の学年の人に迎えられ、私は講堂に入った。

『おめでとう!!』

あちらこちらから言葉が聞こえてくる。

はつきりいつてうるさい。董は、初めて親と桔梗以外の声を聞いたため、少しびっくりしていた。

『これにて、第××回 エーデルワイス女子学園の入学式を終わります。』

「私は、1 Dね・・・。ちょっと楽しみつ。」

新しい友達ができるという期待で董の胸はいっぱいだった。
ガタンッ

初めて座る木の椅子。

「ちよつと固いわね。」

ハア・・・と溜め息をついた瞬間だった。

「こんにちは！ 私、山中 やまなかゆり 百合ひかりっていいです！ よろしく！」

その、山中 百合という少女は、高い所でふたつ結びをしていて、茶髪に黒目。見るからに元気そうな子だった。

「よろしく、百合ちゃん。私は、椿原 堇。」

ちゃんと話せてるかな。同い年の子と喋るなんて初めてだからな・・・。

「へえ・・・あの椿原財閥の子なんだ！ 凄いみんなに自慢しちゃおつ。 あっそうそう、こっちの子は、天宮 あまみやあじさい 紫陽花ちゃん。 私のルームメイトだよ。」

となり にいた、メガネをかけていて黒髪、ブルーアイそして、胸までのかみを一つにまとめ、ななめで結んでいる、おとなしそうな少女が頭を下げる。

「よろしく、紫陽花ちゃん。 椿原 堇です。」

こうして、堇は新しい友達百合と紫陽花ができたのだった。

3 初めて友達（後書き）

次から、沢山キャラが出てきます・・・。

4 1 Dのクラス

4 1 Dのクラス

キンコンカーン

「座れー。」

そういつて入ってきたのは、見るからに若そうな男の人。

「あっじゃあまた。董ちゃん。」

そういつて、百合ちゃんと紫陽花ちゃんは席に座った。

「よし、みんな座ったな。」

カカカッカカ

「俺は、安西 守。あんざい まもる今年1年みんなの担任だ。よろしくな。なにか、質問はあるか？もちろん、俺にだぞ。」

その、安西という人は、黒いツンツンとした髪にちよっといじわるそうな、黒っぽい目。

「うわっかつこいい！いい年になりそうー！」

ザワザワ

「なんだ、質問ないのか。じゃあ、誕生日だけ、2月14日だプレゼントくれよな！」

しーん……。

「ああ、うん。エート……じゃあ、名前 誕生日 血液型を右端からいつていつてくれ。」

ガタンッ

「……天宮 紫陽花……6月13日……A型……。よろしく……。。」

「有坂 ダリア《ありさかだりあ》と申しますわ。誕生日は9月2日生まれでA型、これから1年よろしくお願いいたしますわ。」

「井沢 つつじ《いざわつつじ》とついついいいます。7月5日生まっつれで、A型です。よろしく願ひします。」

つつじちゃんは目に少し涙を浮かべていた。

短い髪を耳下でふたつ結びにしていた。

黒っぽい髪にピンクの目がクリクリと動き可愛い。

「井沢 さくら『いざわさくら』といいます。7月5日生まれでA型です。つつじとは双子で、私が姉ですよろしくお願いします。」
少し眠く寝てしまった。

でも、すぐに眠気はひいていった。

「こんにちは！ 新谷 秋桜といいます。10月29日生まれで、B型です。これから1年よろしくお願いします。」

グー董はとうとう寝てしまった。

トントントツ次あなたの番だよ。 隣の新谷 秋桜に起こされた。

「あつえーと椿原 董といいます。A型の5月14日生まれです。お願いします。」まだまだ、自己紹介してない人がいるや・・・また、眠くなってきた・・・。

4 1 Dのクラス（後書き）

今回は、ここまでです。次話も新キャラがでてきます。

5 忍び寄る影

5 忍び寄る影

「・・・ん、みんな自己紹介終わったんだな・・・。」

「じゃあみんないいクラスにしていこう！ 以上！」

トントント

「ねえ、椿原さんって、椿原財閥の人？」

「ええ、そうですけど。」

「うわあ！ やっぱり！ 私の父の会社をよろしくね！」

えっ・・・

「あの、私に言われても・・・。」

「なんだ、そうなんだ。 やっぱり、ダリア様に言っただろがいいわね。 あなた、役にたたないから。」

えっ・・・

「でも・・・その・・・。」

「ちょっと！ 椿原さんに誤んなさいよ！ 困ってるでしょう！」

「ごっごめんなさい。」

その女の子はいつてしまった。

「助けてくれて、ありがとう。 えっと・・・新谷さん。」

「いいよ、秋桜で。 お礼なんていらないからさっ友達になろう。」

「さすが、秋桜ちゃん！ 見てたよ、董ちゃん守るとこ。」

「・・・すごい。」

「そんなことないよ、百合、紫陽花。」

お友達だったのね。

「あのねえ、董ちゃん。私たち、幼馴染なんだよ！ ダリアちゃんもそうなんだけど中3のとき大喧嘩してそれっきりなの。たぶん、椿原財閥のライバルなんだよね。」

そうよね・・・どこかで聞いたことあるもの、有坂財閥。

「まあ、みんな寮に帰ろう！ 董ちゃんは、ダリアちゃんの部屋のとなりの1002室だよ。10階には、二つしか部屋がないんだよ。スイートルームだからね。」

そうなんだ・・・スイート・・・。

「わかったわ。」

「ああー早く鈴蘭のケーキたべたいいいいい。」

「鈴蘭？」

「私のメイド。今は、紫陽花のメイドでもあるけど。」

じゃあ・・・桔梗も・・・もしかして・・・。

「ニヤアー暇だニヤアー。」

身長138cmの女の子。白い髪に赤い目が印象的。彼女は、

生徒会長の木下 向日葵。

「「いいかげんにして下さい！」」

息ぴったりののは、黒髪、紫目の浦部 桐と茶髪、緑目の会田 薺。

彼女たちは、とりあえず放置。

寮の影で

「椿原今に見ていなさいですわ。」

「オホホッ」

6 紫陽花、百合サイド（前書き）

遅くなつてすみません。

6 紫陽花、百合サイド

6 紫陽花、百合サイド

「起きなさい、百合」

これは、いつもの事で私は百合を起こすのである。

無口な私は、百合の前だと少しおしゃべりになってしまふのだ。

「ほら・・・早く・・・」

「うつうつっ、まだ眠いよお・・・」「そうね、では一人で朝ごはん食べてくるわね」

百合はこれで起きる事を私は知っている。だから

「じゃあね、百合」

「あつ待つて待つてっ起きる起きるからあ
ほら、ね。」

「じゃあ、早く起きなさい」

「んとね、んとチューしてくれたら起きる」

これも、いつもの事。

私と、百合は中学2年のころから付き合っている。俗にいう・・・百合だ。これは、けっして百合の名前を言っているのではなく。

さっして頂けるとありがたいのだが・・・。 チュッ

「じゃあ、玄関で待つてるから」

「うん。 すぐ行く」

ああ・・・眠い

「あつ遅くなつてごめん」

「いいよ。待つてないから」

ザワザワ

「おはよー二人とも」
みんなは、このこと知らないけどね。

7 ダリアの思惑

「はぁ」

私は、102室のドアを開けた。　うわぁ・・・私の自室に似てるかも。

「おかえりなさいませ、董様」

そこには、桔梗がいた。

「桔梗・・・嬉しい！　あなたが来てくれて嬉しいわ!!」

「そうですか？　喜んで頂いて嬉しいです」

「これからも、よろしく」

トントントント

「どなたですか？」

「あなたの隣に住む、101室の有坂　ダリアです」

「まあ、有坂さん。　今ご挨拶に伺おうとしていましたのよ」

「いえ、お隣りどうし交流を深めませんといけないですわ」

「そうね、ダリアさん」

いい人かもしれないな、

「でわ、明日一緒に教室へ行きましょう」

「まあ、なんておやさしい人、有難うございます」「でわ、また明日

」

トントントント

「ダリアです」

「おはよう、ダリアさん」

しばらく、歩いているとエレベーターで9階の人たちと一緒にになった。

「まあ、ダリア様。　董様おはようございます」

ダリアは自信たっぷりに

「おはようですわ」

と言っているだから

「おはようございます」

と返したすると、その人は赤面してもうこつちを見てこなかった。

「女子高だから、そういうのもあるのですわ」

「ええ」

そういうのって何だろう？

しばらく歩くと教室に着いた。その間にも、何人かと挨拶をした。

「おはようございます、皆さん」

シーン

みんなにスルーされた。挨拶してくれるのは百合と紫陽花と秋桜だけだった。

悲しい・・・悲しすぎる・・・これが虐めってやつかな・・・

「せいぜい、もがき苦しむがいいわ。　　オホホッ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1403m/>

先生と私

2011年10月7日07時40分発行